

部落問題をとりあげた

百の小説

部落問題研究所

北川鉄夫

著 者 略 歴

きた がわ てつ お
北 川 鉄 夫

1907年 京都市に生まれる。

1933年 東京大学美学美術史科を投獄のため中退。

戦後、新聞社論説委員，編集主幹，独立映画等を経て，現在
独映協事務局次長，映画評論家。東京部落問題研究会副会長。

現住所 東京都多摩市永山3丁目3-6-403

著 書 『狭山事件の真実』（部落問題研究所）

『笛吹かばや』（部落問題研究所）

部落問題を取りあげた百の小説

定価 2500円

1985年5月1日 初版印刷・発行

著 者 北 川 鉄 夫

発行者 石 田 眞 一

印刷所 合同印刷株式会社

製本所 修 明 社 製 本 所

発行所 部落問題研究所出版部

京都市左京区高野西開キ町34の11

Tel. 075—721—6108

振替 京 都 4—17329

ISBN4-8298-1025-4

部落問題をとりあげた

百の小説

北川鉄夫

序 研究の基礎づくり 7

I 明治期の文学作品

1 江戸文学の残影の中で 14

鳥追阿松海上新話／おこよ源三郎もの／車
善七もの／女人曼陀羅／穢多の大望／落葉
／鋸びき

2 文明開化と自由民権 38

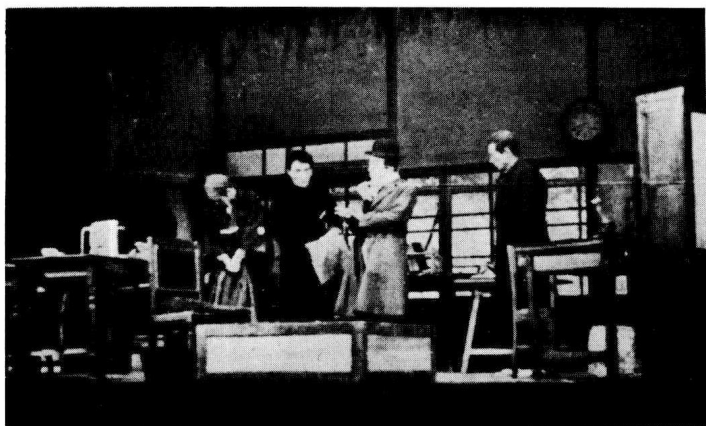
開明世界・新平民／砂中の珊瑚／おこそ頭
巾／移民学園／樊噲夢物語／何の罪

3 二つの講談 61

安政三組盃と鈴木藤吉郎／仇討・鳥追お玉



- 4 風葉・秋声の悲惨小説 73
 藪かうじ／寝白粉
- 5 三遊・桃葉の民権小説 79
 花一本／新平民／村長
- 6 キリスト者の平等・非戦・不信 94
 思ひ出の記／穢多村／一軒家／屠牛場の娘
- 7 写実とロマンと近代化 110
 穢多村と屠牛場の娘／曼珠沙華
- 8 実録小説の歩み 118
 五寸釘寅吉もの／川崎大尉／夜の風
- 9 日清・日露戦争と部落 136
 想夫憐と続・想夫憐／琵琶歌
- 10 「破戒」と当時の論評 155



11 戯曲について少々 177

黄門記童幼講釈とお静礼三／俠客春雨傘／
盆踊長崎団扇絵／斧の福松

II 大正期の文学作品

12 大正期の近代文学 188

部落の娘／因縁事と屋根裏の恋人／涙の物
語と夢園峠／尼僧光珠と彼の僧と髪／村火
事／妖剣紀聞と骸骨の黒穂

13 全国水平社創立のころ 203

火つけ彦七／恋の彷徨者／アイデアリスト
の死と村の反逆者／大正十二年迄

14 通俗小説をめぐる 211

東風物語／いたづらもの／残月／藤浪／紅
涙と香涙／鳩の家と虎公



15 長篇小説の作家たち 221

環境／もぐらもちのうた／予言と俺の自叙
伝／輪廻と煤煙／水平

16 大正期の戯曲から 242

特殊部落の夜と海の勇者／女親／尾上伊太
八と寺の門前／渡り初めと五条河原

17 西光万吉と栗須七郎 249

西光万吉の人と作品／栗須七郎の人と作品

付 昭和のプロレタリア文学の中で 264

火線の構成／記念碑／黎明／プロレタリア
文学と部落問題／教育者と縮図

あとがき 282

部落問題文芸作品略年表 285

部落問題文芸作品出典一覧 298



序／研究の基礎づくり

7

部落問題文芸の研究はようやくはじまったばかりであるといつてよい。私個人がこのことを系統的にみようとしたのも、やっと二十年前そこそのことである。私がこのことを手掛けた当初は、研究というよりは、何より研究対象である作品そのものの発掘が中心であった。幸いにしてかなりの作品が入手でき、研究へふみこんで行けるようになった。しかし、明治以降のぼう大な日本文学の中から、部落問題を中心にすえたり、或いは部落民や部落問題がかかわっていたりする作品をのこらず発見しつくすということは不可能だといつてよい。そのために、私はこの作品の発掘をまず明治以降から敗戦にいたる一九四五（昭和二〇）年までに限った。もちろん発掘の過程では戦後作品もみつかり、それを集めもしたが、戦後のマスコミ分野の著しい発展はその発掘作業に限界が起きざるをえないので、主な対象とすることを放棄した。それは私より若い世代がとりくむであろうという期待もあった。従つて私の対象は、近代日本文学と部落問題に限定されている。

この分野の研究がどうしてこれまで少かったかということについては、さまざまな要因があるだろう。

第一に考えられることは、部落問題そのものについての研究が、戦前には少数の研究者しかなく、ようやく戦後になって研究としての存在権をもつようになったということである。このような研究の浅い状況の中では、文学のような分野に立ちいるだけの力量をそなえるにいたっていないといっても決して過言ではない。そのことは、我国でもっとも長い歴史をもつ京都の部落問題研究所の「夏期講座」や「部落問題研究者全国集会」でも、文学の分科会を独立したのものとしてもちえていないことがその例証の一つである。

そうした中で、私がまったく手探りで独りぼっちでとりくみを始めたのが二十数年ほど前なのである。それは部落問題の文学といえば島崎藤村の「破戒」がやっとその一つとして世に問われている状況のころであった。そんな状況であったから、私のしごととはまず「破戒」以外にどんな作品があるかを調べることから始めざるをえなかった。その間に住井すゑの「橋のない川」（新潮社）が六部にわたって世に出た。この作品が大きな注目を集め、多くの読者をつくりだしていったことは周知のところである。しかし、そのことは部落問題を国民の間にひろく注目させる力となったが、それが直ちに文学研究者を輩出することにはならなかった。私のしごととはそういう中で孤立無援で進めざるをえなかった。

しかし、私の発掘のしごととはまことに孤独なものではあったが、私自身が「無」から出発したことでなかった。それにはきわめて貴重な拠りどころがあったのである。それは岩波書店刊の『文学』誌・昭和三四年二月号に「部落問題文学関係文献目録」が発表されたことである。この目録はどうした資料に拠って編まれたか私には未詳だが、明治初年から同誌発刊の戦後にいたるまでの時

期の、小説、詩、戯曲、映画シナリオの書目である。私の発掘もこの目録がなければ到底手を着けることができなかったといつてよい。その意味で私はこの目録の編者の努力に深い感謝と敬意を今も変らずもっている。私が系統的に研究を志したのもこの目録がきっかけである。そして私はさきにものべたように、この目録に記載された作品をまず入手することから始めた。若干のものは図書館でみることもできたが、大半は雲をつかむような思いで古書即売展へでかけ、そこで一冊、二冊と発見することができた。旅行先で古書店をあさって発見したものもある。従って私の書架にあるこれらの単行本或いは誌紙の一つ一つにはその発見にまつわる思い出がからみついている。この思い出話だけで一冊の書をなすほどである。こうした作業をつづける中で、私は目録の書目の一つたしかめた。目録の記載にかなりの誤りも発見できた。また、かなりの作品が記載されていないことも判ってきた。同時に、記載された書目の現物を発見できないでいるものもある。「八割方は判ったかな」というのが、率直な実情である。

こうして発掘をつづける中で、世界文庫の故人となった前社長の松本富夫氏とともに、それらの作品選集を作ろうということになり、その結実は同社刊の「部落問題文芸作品選集」全五十巻である。この選集の刊行は、それまで入手困難であった作品を容易に手にしうる条件をつくりえたといつてよい。この選集は、「破戒」のような入手の容易なものや、著作権者との交渉ができないために加えられなかった若干の作品をのぞけば、ほぼ収められている。しかしこの選集も私が途中で発見してこれを入れようといった、追っかけっこのような編纂の事情のために、きわめて不整備で系統的ではない。将来同型のものが作られるならば、もっと厳密な分類、系統化が必要であり、取

捨てられてよいと考えている。しかし、ともかくにも研究の基礎条件は、この選集の刊行によって成立したといってよいだろう。この選集に加えていうならば、「西光万吉著作集」全四巻（濤書房）が研究対象として欠くことのできないものである。全国水平社の歴史の中で生まれた、唯一といってよい西光万吉の諸作品は部落問題にかかわったものはきわめて少いが、名作「浄火」や「ビルリ王」など研究には逸することのできないものがあるが、これは選集では省いている。

いずれにせよ、部落問題にかかわる文学研究はこのような現状であった。従って従来の文学史や文芸評論では、この分野への言及はきわめて乏しかった。若干の個別の作品、例えば周知の「破戒」についてはきわめて多くの評論があるが、他の作品については発表された当時の時評的な評価や書評の類いを除いては研究というものはほとんどない。しかし、最近選集などを活用した、かなり系統的な研究書がわずかながら世に出るようになってきたが、これとてまだ緒についたに過ぎない。

さいごになったが、この分野の研究には部落問題、部落差別をどう考えるかということが根本にある。本来は、まずこのことが提起されるべきであったろう。しかし、今日の部落解放運動、或いは部落解放思想についての現状から見ても、全体として述べるのはむずかしいので、個々の作品に即して述べるにとどめた。

さらに、本書は明治初年から十五年戦争の敗戦までを対象としている。当初、明治期と大正・昭和戦前期とに分け、二冊にする予定で、まず明治期を書きあげたが、刊行の都合で一本にすることになったので、書き直した。しかし、十分な時間がなく、明治期と大正以降との量的バランスがと

れていず、極めて必残りのまま、刊行せざるをえなかった。

また、本書では、部落問題文芸作品の状況がほとんど未開拓ということもあるので、まずどのような作品があるのかの紹介に重点をおいて書いた（そのため、引用を現代語訳に直してある）ので、歴史としての流れや個々の作品の分析・論評は浅い。これは、今後私自身のしごととして、また多くの研究者のしごととして残され、ひらかれていくであらう。

■使用写真■

目次写真 一九四八年民衆芸術劇場第一回

公演「破戒」舞台写真（村山知義脚色

・演出／丑松・宇野重吉／志保・山口

淑子／蓮太郎・瀧澤修）

とびら写真 I 島崎藤村「破戒」緑蔭叢書

・明治三十九年三月二十日印刷・二十

五日発行／II 西光万吉氏晩年の写真

I 明治期の文学作品

破戒

藤村

第一章

(一)

運筆寺では下宿を兼ねた。瀬川莊松が急に轉宿を思ひ立つて、借りることにした。部屋といふのは、其裏基つとにある二階の角のところ。寺は信州下水内郡飯山町二十阿ヶ寺の一つ、真宗に附屬する古刹で、丁度其二階の窓に條凭つて眺めると、溪谷の大木を経て、飯山の町の一部分も見える。さすが信州第一の佛教の地、古代を眼前に見るやうな小都會、奇異な北風の屋簷、板葺の屋根、または冬期の雪除として使用する特別の軒庇から、ところ／＼に高く聳れた寺院と横木の梢



1／江戸文学の残影の中で

鳥追阿松海上新話 明治初期で現在知られている限りいちばん早い作品は、一八七八（明治一二）年の久保田彦作（一八四六―九八）の「鳥追阿松海上神話」（とりおいおまつかいじょうしんわ）である。この明治十一年に仮名読新聞に載った作品が、明治期でもっとも早く世に出たものかどうかは断定できないが、それよりも大切なのは、これが江戸の戯作の流れをうけたもので、近代文学としての体裁にほど遠く、刊行も合冊本の形式を採り、挿絵入りで文章をつづったものだということである。序章にふれた岩波刊の「目録」にはどういふわけか出ていないが、当時かなり読まれたようである。同書の「序」で「我仮名読新聞第五百四十号、客歳十二月十日を以て、始めて離報欄内に記載せし鳥追阿松の伝は」とあって、この作品そのものは明治の前期に流行した実録小説である。また、この実録ものの一系統である「毒婦」ものである。花井お梅、権妻お辰、高橋お伝などと並ぶ「毒婦」ものの一つである。そして、作品の様式は「東京は未だ江戸と呼び、木挽町の采女が原に、埴生の孤屋の板庇、月洩る軒の破家に、親子みたりの非人あり」といったフリ仮名つきの文語文体である。まぎれもない江戸の戯作文学の伝統をひいた作品である。



「鳥追阿松海上新話」より